

博士論文の要旨及び審査結果の要旨

氏名 山田 沙季
学位 博士 (医学)
学位記番号 新大院博 (医) 第 1004 号
学位授与の日付 令和3年3月23日
学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当
博士論文名 Timing of surgery to treat ulcerative colitis: An investigation focused on Japanese adults.
(潰瘍性大腸炎に対する手術のタイミング: 日本人成人における検討)

論文審査委員 主査 教授 味岡 洋一
副査 教授 寺井 崇二
副査 准教授 横山 純二

博士論文の要旨

【背景】潰瘍性大腸炎の治療は内科的治療が中心であり、チオプリン製剤、カルシニューリン阻害薬や生物学的製剤の出現により近年その治療成績が向上している。一方、合併症や大腸癌の併発などにより外科的治療が必要となることも少なくなく、25-30%の患者が最終的に外科的治療を要するとの報告がある。大腸全摘および回腸囊肛門吻合術は1978年にParksとNichollsらにより報告された潰瘍性大腸炎に対する手術術式であり、世界的な標準術式となっている。近年は様々な薬剤治療後に手術が行われることが多くなっており、術後合併症や術後のQuality of life (QOL) 低下を避けるためには、適切なタイミングで手術を行うことが重要である。しかし、潰瘍性大腸炎に対する手術のタイミングについて具体的な基準は明らかでなく、判断に苦慮することも多い。【目的】患者側からの視点で手術のタイミングを評価することを目的とした。【方法】1985年から2013年に当院で潰瘍性大腸炎に対して大腸全摘および回腸囊肛門吻合術を施行された203名のうち、現在当院に通院している101名に対して記名式郵送アンケートを行った。

【結果】有効回答72名(71.2%)の解析を行った。手術を受けて良かったと回答した患者は65名(90.3%)であり、手術を受けなければ良かったと回答した患者は認めなかった。手術を受けたタイミングについて、38名(52.8%)が適当であったと回答した。32名(44.4%)がもっと早く手術を受けたかったと回答し、その時期は6か月前(中央値)であった。また、もっと早くと回答した最も多い理由は「内科的治療が長期になり苦労した」であった。手術を遅く受けたかったと回答した2名(2.8%)の理由は、「手術を受けた時にはなかったもっといい治療法があると思うから」であった。もっと早くと回答した群で緊急手術が23名(71.9%)含まれており、適当であったと回答した群の13名(34.2%)と比較して緊急手術の割合が有意に高かった($P = 0.002$)。「もっと早く」の群でチオプリン製剤の使用例を5名(21.7%)認め、使用頻度が高い傾向にあった($P = 0.089$)。術後のQOLを反映するMedical Outcomes Study 36-Item Short-Form Health Survey (SF36) スコアは日本人の全国基準値と同等に保たれていた。【考察】本邦および欧米で潰瘍性大腸炎術後のアンケート調査を行った報告があるが、いずれも約90%の患者が手術を受けて良かったと回答しており、本研究と同様に高い満足度が得られていた。また、手術を受けたタイミングについて、

対象者の 43-53%がもっと早く手術を受けたかったと回答しており、本研究と同様の結果であった。今回の検討では重症症例が必ずしも早期の手術を望んだという結果ではなかったが、緊急手術の症例において「もっと早く」と回答した患者が有意に多く、緊急手術例の検討では「もっと早く」と回答した患者でチオプリン製剤治療が行われた症例が多い傾向にあった。欧米の報告では、生物学的製剤の使用が主流になった現在、手術を行うタイミングの見極めがより一層難しくなったと論じている。本研究では生物学的製剤使用症例は含まれておらず、新たな検討が必要である。手術の見極めが困難な理由として、国内外ともに内科医が初診医となり治療方針を決定することが多く、また、術後合併症に対する不安、手術に関する情報に乏しいなどの理由で患者が手術を敬遠する傾向にあることが挙げられる。治療早期から外科医も介入し、手術について十分な情報を提供した上で手術のタイミングを逃さないことが重要である。当院では内科外科の協力体制を確立して治療方針を決定している。潰瘍性大腸炎の治療のゴールは患者 QOL の改善である。本研究では手術患者のみを対象としているため、この結果だけから手術を積極的にすすめるべきとするには限界があるが、術後の患者満足度が高く術後 QOL スコアも良好であったことは外科的治療の利点であると考えられる。本研究は経過観察が行えている症例のみを対象とした単施設による研究であり、バイアスの多い研究ではあるが、日本人患者視点を考慮した手術タイミングの検討は臨床的な意義があると考えられる。【結語】潰瘍性大腸炎手術に対する患者満足度は良好であるが、緊急手術となる可能性を有する症例については、早い段階での手術を考慮する必要がある。

審査結果の要旨

潰瘍性大腸炎 (ulcerative colitis:UC) の治療は内科的治療が中心であり、近年その治療成績は向上している。一方、合併症や大腸癌の併発などにより 20-30%の患者が外科的治療を要するとの報告がある。しかし、UC に対する手術のタイミングについての具体的な基準は明らかでなく、判断に苦慮することも多い。本研究は、患者視点からみた手術のタイミングを評価することを目的とした。

大腸全摘および回腸囊肛門吻合術を施行された 203 名を対象に、外科手術を施行されたことに関連してのアンケート調査を行った。有効回答は 71.2% (72 名) であった。90.3% (65 名) が手術を受けて良かったと回答していた。手術のタイミングについては 52.8% (38 名) が適当、44.4% (32 名) がもっと早くに手術を受けたかったと回答していたが、後者の群では 71.9% (23 名) が緊急手術を受けていた。術後の QOL を反映する SF36 スコアは、日本人患者の全国基準値と同等であった。

以上より本研究は、UC の治療に関しては早期から外科医も介入し、手術について患者に十分な情報を提供した上で手術のタイミングを逃さないこと、緊急手術となる可能性を有する症例は、早期の手術を考慮する必要があること、を患者の視点から明示した点で、学位論文としての価値を認める。